

二三六

諸國怪談實記  
五

2266

人家大有益書目録

左の載りは世と世に  
おぼへた所を速用と  
點し書大なるより  
なり

一博物巻

博物不入にお鏡の世に  
とありゆりするの儀は  
と見せしむるに  
ありともいろはは  
ありともいろはは

一妙術博物巻

妙術博物は本ハ  
ありともいろはは  
ありともいろはは

一日記

日記は正月門  
ありともいろはは

一永曆大報書天文大成

永曆大報書天文大成  
ありともいろはは

一海寰方代寶鑑

海寰方代寶鑑  
ありともいろはは

まで作らるる

ありともいろはは







諸國懐徳実記

又之卷

吉川氏和お寄妙乃り

一と来吉川惟是殿と定へし國字を家として中郡  
の故実奥をさるり保を寔止聖徳懐徳傳めも  
しるを實傳くおよからしめて世に實徳をうく  
去りも年傳へ人もさる前なれども徳文志に  
及よんを實徳とてしるすやうにすべし  
多量とてなまきり傳へぬさればお寄のり  
御家の徳と及あまうけて一と勝上京ありしか  
うごころこしきるべしとてあまの徳の御寄の別

諸

五

何来の欠損あり指教を録するにたれども是  
なる伝へて其傳へたるは再傳のうへに家司  
何来出あてしるす例のり成るすよとに懐  
の經冊を出て

神代卷を分かれをわやとなめ 又よる  
とてくけしるる家司これをのりくはらふは  
びのりてさるる子建速とてしる作あは二  
二日わたりて見なれはするわ披露はやく  
りあし徳傳を御寄の誓約ありて立系中毎  
系上あはるるもをさるる感へり御寄傳の  
實徳を傳へるすよを後世に傳へしめ  
らるる例に志づく山岳なる板およる徳士と





諸

五二

や一そそる承承の姓かすりりれハ

一びんが何れ地も物とゆけ又いりるのきりあきも

とよまに姓三日のぼりはつてお前様とあれハ

いととていれれのもをなせくけさハ又いさあ

とよまふてびん守とよりあつ年まふるおふ

なとやうとよまの縁角の考乃まもかひ出で

け年の事とおお列一島小早題とて氏大はふれり

中おそく吉川氏の姓お徳あるのを感じていしと

おの姓してあふり一たりもかたれハ惟是翁にき

中んとをの長又人お後して徳山長かむれたる

に徳士乃田子前仲の徳あつて徳成まふさあわつる考の  
おんといは日の海ふり守あし一あまも難成これ



いふかたこれの縁を一つしてはね物なれすべしとて  
身をばあぢやうとてとを改めつね出ありしを承の八幡  
へま物乃々

夕をけ雨のたぬよのさうねの氏ハ草葉もさうさう  
かりけるおひ日午の時より天大の陰重をかりて雨  
ふらふ三日之夜なれハ氏又ちなふくくくしてハ早冠  
早も難懐まりとて晴の糸を縁びいへば前ふことくは  
とあくとけあふあ

かゝるむもあつたのね神風よ子次とけハ天乃ハ重雲  
けおを納ありてかきやを晴てがれが考よりあひれ前  
ハゆるでも晴の糸ハさすたあぬのゆりゆりとてげとの  
ちねハ威ハたあねあ天乃あひとさうりくははれハ

諸

五ノ三

ろかひしねをききしけうぬ

一技よ世の人景あつた小所がなごひのおと  
こころや丹中あつた思も一なりとてあめが下とて  
け弁のうらねを紙など共るあましもそおねはあつ  
すえまえおあつた小所なれハ神葉乃おもあつけ  
までもはあつたあつた小所ハ仁助天宮ハ時兼和  
のはんくととりおねの那自所良葉が縁守お  
つすまが女とあつたけいねのまごも右の役是  
とすまごとあり小所が集るあ日のとてけりな  
ふぬごひの和およむとせんいあつて  
よ子振針もみらさるるたあめまはとあひつちあつ  
とあり



一は抄にいつく能國ハ秋原ふ急岩をさし人あり侍臣  
の三好とてのまごひる翁

天の川道代あふせれたるをわたりて中津津さすべし津  
とよきてるをあふせりけしおを急岩ふ侍臣あふ絶ふ  
物なきがうして侍臣あふまらけりけしお月よりと  
四月まぐいふとあふまらけりたれは道代とせと  
あふいのりさうたれど叶はらば道を守能國あ  
よと一乃宮にまのせとあといのまごひるたれは  
ありていひけるおとまご急岩ふは小國一侍  
臣へあまらるるべし能國ハ侍臣永愷たるが  
の入りと早と遠侍つふひひくまゆり梅  
津見ふふ急岩あふ侍臣の跡に後きえ愷の子

諸

五十四

あり侍臣に守ま

一後を能國遠侍れ玉遷行の時日玉あし  
の仲そ難風あふせあひたると記

我とそハ仁徳侍守よ仲の能あふ侍風年一侍  
わし御制長あふれはさそ侍風あふまりて出航つ  
かき急岩せしとあふ急岩のあふ侍侍侍侍  
村にあり侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍  
つとらあり侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍  
あふ侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍  
たひひく侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍  
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍  
と侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍







植屋一庵の友がえびのうらごとく斗へて白ひそ  
こよみあふとれうりは友花咲次と見え  
右に夜せふりく軍兵ふくおむむとよかおひ  
えおとても平か毛又山子乃用ひふり情多那  
坂下とてふ所時時出れあひ其遠の志不志跡  
と二晩一々後をそと日たふ裁作れいそおむむ  
と出ぬ

山娘の事

一此の山娘年申乃るとも奥刺よさる御守を  
り生受板橋ゆく重受の居のそあひその御人  
乃意とさる奥刺あて人丸赤人と始代りのお他

跡とさるおれし川政勢の介の書籍とさるあま  
はき重月未つてさあれふもこれ秋のめいり有明の月  
え氣やとく歌ゆ婚の余波ゆく情ませあひく  
をわいと遠きけて中文字の札おあのをあされと  
おの意あひつらぬ姓大ぬふあひげうくとあま  
おれの中は清子と仰りてあてぬ年の後二八斗乃  
女と白くえもい建ぬあわく由例をくまとつて  
おまませうとて守懐さめといえあまも三徳兼備の  
おあれお少も強げんお少ひひの路へ暫耐りて女  
もどつておあひつらぬませといてあまも三徳兼備の  
し行方おあひつらぬおあひつらぬおあひつらぬ  
たれおあひつらぬおあひつらぬおあひつらぬ



よききく近所の元中も殺く出所もあると一不  
ある日常長何系や殺しては様急を何と守出例を  
く行く女のやとを物所へ去る遠くへ送て下よる  
城下近所又の赤中の内より物所前へ何とて女を  
てもけ七重八重の團といふとも叶うが赤とる不仕  
の着きぐ一は仲の物所を育へ私室小室仕客  
子とて布と下と上と守もむと修るふて後  
更引支度と一初夜とて待わたりきるゆく夜も更  
次宮の時斗と中あはは次の方より行方守いふめと  
く机小室赤あや中も赤くゆく物所とすに何系  
斬り小睡候よかされこへい一化生のとくする後れと  
小刀と扱たぬとて赤く一と痛く小眠と考てけり

一は種あく一はの風度とす山登の間の様子と云うに  
ゆく物所一く山前より向ひか困よかまらり折し  
とて何系が方とみくさつて物所とて行くふ  
姿云候も折とる山登の揚子丸を初切の玉座のあ  
とて更く一は赤あまらう城へ一とてさる小氣と動け斗  
あまらも人あまらもやうとて子小枝ちか候小地  
其後の様子と激破りて物所とれもよの甲業子  
てたかあや切地有て血がまらひまらも海女の  
あまらいんもあまらもあまらもあまらもあまらも  
常世の面く何世の以来を紅まらと作出されぬく  
とて一は血をはまらくはまらくはまらくはまらく  
城の本とまらりまらり教書の團と知く若く入血小



頼みの丸もどきく二の巻もあつて是れ血の巻入りなり  
 海の内へくさくさ代生の死骸なり 船て舟へ引出  
 検するに髪へあつても又淋の内脚も何事遠  
 ふろよ一疾は後継中く口わさされもち力先保く  
 入て指交病なれ死さうとみたり 船て死骸と標ふ  
 入を病を山寺へ入る子田も出来たる三百又合す七  
 と同洲かどくさる船中へく番成勤たれも何の  
 子田も出来たるの理葬儀行すもつらむとけふとて毛  
 後備友の元へ出来たるの事もあつたかといふあしき  
 是の如程有書ふは死にさうなりとも日中めく入る事  
 事ふのあつたはく山寺とすもあつたはく山寺とす  
 谷の邊へそ移ともいふ事あり山寺へ移る女たす





とる程そそ是又字ふさの害とさぐん右のそとく世前  
一ゆいしと身世道かく御りゆ様と生討ハを子、さ  
更かみう導ん湯菜と切せん位をさぐりと返答あり  
るう一更一付辰年敷之くこと久懸て海一  
真列の二件いふまでもも予が知事の前真列作違那  
田知とと方御行者之案一ふ酒かて振替るに極必  
るそ相理一はと亡又去るをさぐる故と記一竹りぬ  
一私曰掛列表よりとわ其芳性大勢持ふ行西ます  
年くまり予がをさぐりも行まの多一一年ゆりて  
お便一はる苗年ハ例の傷物ふさく一とる傷りや  
上希とと方なり又里斗川又入世中ハ括介を  
と打ちふさぐは八はともさぐ一眼のつたのりとの

二三人立しう傷ふおれ毛も強斗お悪くぬしと  
よし屋の入来ひさるる遊を扱くまら者なりそれ  
女より男の長とさぐり程の髪と乳一目の光りはさく  
滑入斗ありしとさぐりとの三又又首つて舞をさ  
娘ひらね私ハは命く西作もさぐり藤入りやあふ  
さぐりし一傷ふおの者小病それハ希ふは程のり  
つりゆ様とさぐりとのめく有下しゆをさぐり分る子  
ゆもあひらと強ふ不付さぐり曰借く瑞くさ事  
くれ定くお徳のゆびとさぐりさぐりさぐりさぐり  
はらるる事つらばあふと向ふ本の子しらさぐり云男  
位のよたさぐりさぐりさぐり本のをさぐりさぐり  
新とさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐりさぐり



備前の長門に於てとらると中合と本の子おさうととと  
はうた村本の子見ゆると吾指をよと遊ちしし  
ハ終つたもさびく月夜に  
よそハ一白雪のさぬる中か  
ついでに  
ついでに

古器の妖怪

一流花の苗色は何素と名はる油土あり一日を  
湖沼の會ふはさしは月の中をまて  
星さふ何とぬくもあり  
腰受とらあり  
体居るしが倒れ  
つる常事

發せしめ  
ついでに  
ま何と  
ま  
一  
と持てる  
そ  
ひて因  
なれ  
ある  
妖怪も  
め之巻大段



一 常用同合辞彙引 懐中小本金一冊 ○此中ハ字引の至てありき字引とハ中ハ是れ也

一 大成正字通 絶好老改正 全小本一冊 梨翁一子及附 本の大増補ニ字數發見集彩板仕

一 甲引正字通 ○此中ハ字引ハ字引ニ源流子引千字文 長玄海堂集 ○校書快り

一 常用虫札大全 世の要利 然りあり 虫物の流式百吳忠相の標本速あつめのセリ

一 医療方規類大成 藤田のげん未定類一冊一冊の

一 千字文玉字名 千字文ハ凡ハ世衆の事 教くべきもの

安永十年 辛丑表二月 心麻橋南に丁目 古文字倉市書流書板

大坂虫博

古文字倉市書流書板